

# 視点を変えれば、 世の中は変わる。

たとえば  
半分だけ水の入ったコップを見て、  
もう半分しかない、と思うか、  
まだ半分もある、と思うか。

視点を変えれば、  
世の中の見え方は変わってきます。  
当たり前だと思っていたことでも、  
違う視点から見つめ直してみると、  
新しい発見があることがあります。

Rethinkフォーラムは、  
一人では気づけない  
新しい視点に気づくことで、  
地域活性化のきっかけを見つめる場です。

視点を変えれば、世の中が変わる。  
地域が変わる。  
未来を変える発見は、  
意外と身近に  
あるのかもしれない。



地域に根ざしたイベント「Rethinkフォーラム～視点を変えれば、世の中は変わる。～」(主催：下野新聞社、後援：栃木県、宇都宮市、栃木県商工会議所連合会 他 協賛：Rethink PROJECT)が5月17日、宇都宮市のペルヴィ宇都宮で開催されました。第1部は作家の室井佑月(むろい・ゆづき)さんが「新たな視点との出会い」をテーマにトークショーを実施。第2部では福田富一(ふくだ・とみかず)県知事、古池弘隆(こいけ・ひろたか)教授が加わり「Rethink栃木～みんなで創ろう未来のとちぎ～」をテーマにパネルディスカッションが行われました。

## ゲスト



むろい ゆづき  
室井 佑月氏 (作家)

演題：新たな視点との出会い

1970年青森生まれ。ミス栃木、モデル、女優等の職業を経て、97年に「小説新潮」の「読者による『性』の小説」に入選し作家デビュー。現在は、女性の代弁者、代議士の妻、お母さん、という立場からテレビなどのコメンテーター、シンポジウムのパネリストとして、幅広く活躍中。

### 「書く」、「発言する」が私の居場所

— 青森県出身ということですが、「ミス栃木」のご経験がありますね。

人として大事な思春期である中学、高校時代を栃木県で過ごしました。栃木は第2の故郷です。県庁林務部でアルバイトをしたこともありますし、1991年に「ミス栃木」になりました。これはとても大きな出来事で私のメディアデビューは下野新聞です。

#### ★ 少数意見に光を当てる

— 作家、コメンテーターとしてご活躍です。「視点を変える」ことを意識していますか。

私は物書きの中ではまれな人間で、政治から福祉、大人向けからホラーまで書けます。断るのが苦手で、仕事を受けていたらいつのまにか膨らんでいきました。「できない」と思っていたら、仕事の幅は広がらなかったと思います。物書きの仕事が続ける中で、不得意なところには実は発見があるんじゃないか、と思っています。

新聞や雑誌の連載の執筆は男性が多いです。私はジェンダー差別は絶対に嫌ですが、ジェンダー差はあると思います。女性らしい心配りで、光が当たってなさそうな、ほかの人が書ききれていない所に光を当てるのが私の仕事です。

— 違う意見を言う、批判を受けることもありますね。

みんなが正解だ、としていることに「私は正解だと思わない」と言うのは、勇気が必要です。敵をつくるのは構わないです。ただ人間は本当に多面体なので「議論しているそのことだけが全てなのか？」と考えるようにしています。相手の訴えで「あれ？話をこまかしたんじゃないか」と思うことがあっても、「ごまか

したいほど、それが正しいと思うのはなぜか」ということを聞いてみるべきだな、と思います。ごまかすのは何か理由があるはずですから。

— いろいろな分野で意見を求められる機会があるから、それぞれの立場になって考えるのですか。

意見を求められる、書くというのが自分の「居場所」です。居場所を与えられることはすごくうれしいことで、感謝しています。せっかくこの場を与えられたのだから、反対意見の人でも話は聞いてみます。別に迎合することはないです。違った意見だったら「やっぱり私はこうだと思う」と言ったら良いのではないのでしょうか。物書きやコメンテーターをやっていますが、実は私自分だけの意見じゃないです。大きな声を上げる人はたくさんいるので、光が当たっていない人の巫女(みこ)みたいに、私の書いたものをたくさん読んでくれたり番組を見てくれたりする人、それすらしない人たちの巫女みたいに、人々の声の集合じゃないといけないと思って意見を言います。ただ、少数意見だから正しいという訳でもないです。正しいか正しくないか、なんて本当に何十年も何百年もかけて、誰がジャッジするかその視点で全然違ってしまふものだと、最近では思っています。

#### ★ 人生の優先順位を明確に

— 仕事をしながら「Rethink(リシンク)」、新たな視点で自分を切り替えなければいけない、という時もあります。

新しい切り替えは、どんだんやるべきです。なぜなら「この時代に生きている」とか「女である」とか、変えられないことはいくつもあります。だから「ちょっとこれ、面白そう」というものに食いつけるようになっておきたい。そのためには考え方をフラットにすることが必要です。思い込みは不幸せを呼ぶような気

がします。みんなから「嫌な人」と言われている人でも私にとっては嫌な人じゃないかもしれないわけです。

— 新しい視点を持つことはとても大切なことなのですね。とても大事だと思います。新しい視点を持つことは自分に刺激を与えるということです。自分から刺激や新しい発見を見つけていかないと、人生は結構長いですよ。私自身50歳で再婚するとは思いませんでした。1度結婚を失敗しているのですが、年齢を重ね人間として「まろやかさ」みたいなものが出ているので、もう1回チャレンジしてみました。

ただ、新しいことに踏み出せずウジウジするというのも分かります。悩みに悩んでウジウジする時って、大概その問題は考えても解決しないことなんですよ。だからずっと考えてしまいう訳で。そういう時間はつらいですね。

— 悩んでつらい時に新しいきっかけやひとりで変われたりすることがあります。チャンスにパッと乗るから乗らないかっていうことを決める時に大切なことは、人生の中の優先順位ですね。私の場合は息子が一番。息子の「お母さん」というのは絶対に誰にも取れない居場所でもありますから。編集者から理不尽に原稿を書き直すように言われた時でも、この原稿を仕上げることで息子と焼き肉に行ける、温泉旅行に行けるとしたら「はい、分かりました。書き直します」と言えます。

意外と「書き直します」と言えるのはすごいことで、私が生き残ってこられた大きな要因です。それが言えずに消えていった作家もいます。子どもや高齢の両親の生活を支える一家の大黒柱で「重り」が付いているから「書き直します」と言えました。優先順位で息子が1番と決まっているから、強くなれる自分がいました。

## テーマ Rethink栃木～みんなで創る、未来のとちぎ～

パネルディスカッション出演者 室井 佑月氏 (作家)、福田 富一氏 (栃木県知事)、古池 弘隆氏 (宇都宮共和大学シテライフ学部特任教授)

モデレーター 工藤 敬子氏 (フリーアナウンサー)

#### ● 全国のモデルになる街づくり

工藤 こしは栃木県誕生150年です。県民が幸せを感じながら暮らすためにはどのような街になったらいでしょうか。室井 久しぶりに宇都宮へ来ました。JR宇都宮駅東口を見て変わってびっくりしました。街は多くの人たちが「こういう『街』が欲しい」と言ったら、そういう街になるのだと思います。宇都宮は次世代型路面電車(LRT)、コンパクトシティ、レンタル自転車など、全国のモデルになるような街ができるのではないのでしょうか。福田 とちぎの魅力発信し、オール栃木で取り組む戦略として、「とちぎ創生15(いちご)戦略」を策定しました。子育て支援や移住定住などで人口減少に歯止めをかけたい。都市づくりがマーケットイン(市場や購買者の立場で必要とするものを提供すること)の時代になりました。マーケットインして道路整備や災害対応、公共交通の充実などの差別化を図らないと持続可能な都市は実現できません。古池 専門は都市計画、交通です。一番力を入れてきたのはLRTです。先日、ヨーロッパへ行き実感したのは、世界で起きている「車から人へ」の転換です。宇都宮でもそうした動きを推進したいと考えています。

#### ● 若い女性が活躍できる県に

工藤 街づくりにおいては、どのような視点が大切ですか。室井 いろいろな世代の人たちが集える場所、そのバランスがとれて私の考える幸せの形に近いと思います。福田 県は「スマート+コンパクトシティ」と言っていますが、徒歩、自転車、バス、鉄道などを自分で選んで目的地まで行ける、このような持続可能で賑わいのある街をつくる必要があります。また、現在の課題は若い女性の東京への流出です。若い女性が活躍できる産業の育成に取り組み、流出に歯止めをかけていきたいです。古池 都市間競争に勝つためには、住みやすい魅力的な街にしなければなりません。その手段がLRTを含めた公共交通だと思えます。栃木県、宇都宮市には勝ち組になってほしい。

#### ● 住みやすい街は魅力度が上がる

工藤 栃木県の未来の展望をお願いします。室井 栃木県のみなさんに提案したいことがあります。日本全国、海外から観光客が来るとしています。道を聞かれた時には、片言でもいいので親切にする。そうするとその土地がすごく良い土地に見えます。また訪れたい土地になります。移住してきた人たちは、

栃木県に住む仲間です。移住者に優しくすることも栃木県の魅力を上げていく大事なことだと思います。

福田 公共交通の充実が必要ですが、一方で、道路も重要なインフラとして必要です。車と鉄道が共存し、どこへでも移動できる社会がマーケットインの差別化が図れる、誰もが住みやすい街につながると思います。国連の持続可能な開発目標(SDGs)の考え方は、誰一人取り残さない、「自分ができること」ができるという社会です。心豊かな人に優しい栃木県を、県民のみなさんと共に、ぜひつくりたいです。

古池 LRTの役割は、構想から30年以上たち交通渋滞の解消から街づくりへ変わっていききました。JR宇都宮駅東口には8月下旬にはLRTが開通します。駅西の大通りにも一刻も早くLRTを開通させ街を活性化することが重要です。LRTはあくまでも手段であって、目的ではありません。幸福度を示す「ウェルビーイング」という言葉があります。自分らしく本当に豊かな生活ができる街が選ばれていくと思います。日本中がまねをする、手本になるような栃木県、宇都宮市にしていきたいです。

